

子供のころ私は考古学に興味があって、昔の大きな建物の壮麗さや、隠された宝を想像するのが好きでした。中でもエジプト・ギザのピラミッドと並んで世界の七不思議のひとつ、バビロンの空中庭園にはどんな草木が茂っていたのだろうと胸を躍らせました。空中庭園とはネブカドネツアル王の王宮にあった、現代で言う屋上庭園のことです。その存在はダニエル書に書かれていて、その広さは王が散歩できる程だったことが解ります。虚栄と貪欲のために人間の叡智をかけたこの王宮は、後に破壊され、地上から完全に姿を消しました。その顛末は今日読む箇所を象徴しているかのようです。

聖書を開きましょう。ダニエル書 4 章 25-34 節です。

あらすじ)二つの夢

捕囚されたイスラエル人のダニエルと三人の友は、秀でた知恵が認められ、捕虜とされた敵国バビロンの王・ネブカドネツアルに仕えることとなります。神様はこの王に夢を見せ、その夢の謎を解くのがダニエルの役割でした。

一つの夢は大きな木の夢で良く茂り、獣が木陰に宿り、鳥が巣を作るほどでした。そこに天使が現れ、命じます。「この木を切り倒せ、根と株だけを残して天の露に濡れるままにせよ。心は変わって獣の心とされ、七つの時を過ごすのだ。」そして天使はこう締めくくりました。「人間の王国を支配するのはいと高き神であり、御旨のままに誰にでも与え、最も卑しい人をその上に建てることもできる。」ダニエルは、この木とはネブカドネツアル王の事だと伝えました。

1)驕り高ぶり

私たちが客観的に見ると、夢はネブカドネツアルへの警告で「おい、ネブカドネツアル、おちおちしておられないぞ」と思います。しかし彼にはどうもピンとこなかったようです。解き明かしを聞いた直後は不安に思ったのかもしれませんが、しばらく様子を見て、帝国に具体的な陰りが見えないと、安心しきってしまったのでしょう。12 か月を過ぎたころには多忙なはずの王が、安定した国政の中、悠々と散歩を楽しむ余裕が出てきました。

例の屋上庭園を散策し、木陰に抜けるさわやかな風が芳しい花の匂いを運ぶのを楽しみながら、彼は果てしなく広がるバビロン帝国を見下ろして言いました。「大いなるバビロン。我が大いなる力を持って建てて、我が威光を輝かすもの。」

夢の啓示によれば、人間の王国は、神様ご自身の栄光のために建てていると伝えていますが、彼はそれを心に留めませんでした。また王とは国のために立てられていることを認めず、反対に「この帝国は私の威光のために、私が建てたのだ」と言っただけです。

警告を受けているのに、心に留めず、豊潤の中で驕り高ぶる。これはネブカドネツアルだけの問題ではありません。ここに人類の罪の源「原罪」が描かれています。

アダムは知恵の実を食べれば死ぬと警告を受けていました。遜って真剣にその言葉を受け止めることをしなかった彼は、何不自由ない楽園の暮らしに安穩としました。そしてどの木の実をも取って食べてよいという与えられた自由を、自分の持っている権利と取り違えます。「私の権利の及ぶ私の楽園」と驕り高ぶった時、サタンに隙を与えてしまい、つけ入れられて、警告の知恵の実を食べてしまった。傲慢とは、アダム以来、私たち人類が共通して抱える罪の本質です。

神様ではなく、神様の与えてくださる善いものにだけ目を奪われる。その時、私たちは与えた方を注目せずに、

与えられた自分を見つめて大きくします。そもそも自分とは神様から与えられた存在であることを忘れます。この「見るべきもの間違い」が「罪」です。その結果、与えられた中で最も大切な命を失って、死に至ります。これが「傲慢」の姿です。

## 2) 砕かれて遜る

ネブカドネツアルが言い終わらないうちに、天から声が響きました。「王国が取り去られる、人間の社会から追放され、牛のように草を喰らう。」夢ではなく、今度は直接神様の宣言を聞きました。直ちにその言葉通りになり、彼は人間の心を失い、獣の心を与えられてしまいました。

しかし神様によってこの状況に期間が定められていました。「七つの時が過ぎる」とは具体的にどんな期間の事かは解りませんが、その間に体毛は鷲の羽のように、爪は鳥の爪のように生え伸びたとありますから、数ヶ月か数年か。とにかく彼のタイミングではなく、神様の定めた時間が過ぎたのです。

時間とは、神様だけが主権を握り続け、今も人間が及ばない、神様の尊厳の領域です。その時間の中で、憐れみ深い神様の計画によって、人間は神様のお取り扱いをいただきます。ネブカドネツアルはこの時、神様の領域の中で、遜ることを教えられ、ついに神様の声の響いた天を仰ぐことができました。

人類の罪の系譜を受け継ぐ歩みは、やがて必ず傲慢にいたります。その時神様は直接宣言され、私たちはその言葉通りに倒され砕かれます。しかし倒された者だけが遜る者とされ、神様としっかり結びつく者として作り変えていただけるのです。驕る者を倒し、人間の傲慢を砕くとは、実に神様の憐れみ深さを表す慈愛です。

## 3) 異邦人の王による告白ー世界福音への広がり

天を仰いだネブカドネツアルに人間の理性が戻っていきました。その中で彼はいと高き神様と出会いました。この方の支配、神の国が永遠に続くこと、その前に人間は無に等しいことを認めることができました。すると帝国は自分が築いたと思っていたことが、間違いだったと解りました。反対に神様の建てられたこの国のために、自分が威光を表す王とされていることを受け取ることができました。ダニエル書のネブカドネツアルに関する最後の記述は、真理の神様への信仰告白と讃美で結ばれています。「私は天の王をほめ讃え、あがめ、讃美する。そのみ業はまこと、その道は正しく、驕る者を倒される。」彼にとって驕る自分が倒されたことは、神様の正しさを受け取る、祝福の経験でした。

さて、彼の告白と讃美は、彼一人の出来事ではなく、ここが人類の救済史のターニングポイントになりました。

アブラハムが選ばれた時から、神様の救いの計画は一旦イスラエル民族の歴史の中で繰り広げられていました。その中で彼らが捕囚されたことをきっかけに、救いの計画は再び異邦人へも向かいました。バビロンの王ネブカドネツアルの信仰告白は、その後、東方世界に広がっていったはずです。

この救いの計画は、救い主イエス様の登場へと向かいます。イエス様が誕生なさったあの夜、王の誕生を祝い、あがめるためにやって来た東方の博士たちとは、ネブカドネツアルの信仰告白を受け継いだ人々と考えることができます。救いはイスラエル人から異邦人へ向かったのです。

一方で、イスラエル人は救い主を政治的解放者と考えていました。ところがイエス様は最も卑しい人として生涯を歩まれ、呪われた者として木にかけられ、十字架の死を向かえられました。この方が王であるとはイスラエル人には到底考えられませんでした。しかしネブカドネツアルが夢で与えられた啓示には「神は最も卑しい人を王国の上に立てることもできる」とあります。貧しい馬小屋で飼葉おけに寝ている、か弱い赤ん坊が、王だと最初に認めることができたのは、イスラエル人ではなく、この啓示を受け継いだ異邦人の博士たちでした。

そのイエス様は死んで終わるのではなく、復活することで神であり王である方だと、ついに全世界が知るに至ります。復活により王となられる方を知る恵みは、まず異邦人に啓示として与えられ、実現し、イスラエル人に

向かいました。救いの告白は異邦人からイスラエル人に及んだのです。

このようにイスラエル人から異邦人へ、異邦人からイスラエル人へと双方向の中に、救い主イエス様は位置づけられます。世界はイエス様によってつながれ、調和している。救いの計画のなんと美しいことでしょう。

私たちが倒れ砕かれ遜って主を仰ぐ経験は、個人の祝福に止まらず、人々の共同体の祝福へと波及します。

結) 放した手を主がつなぎなおしてください

神様と私たち、私たち同士の関係とはイエス様を中心に手をつないだ輪のようなものだと思います。そのありさまから私たちは父、子、み霊の三位の神様が手をつなぎ一体となっておられる姿を知るのである。三位一体の神秘は説明で理解するのではなく、こうした経験によって仰ぐべきものです。これが教会の交わりです。

傲慢とはその手を放してたった一人で立とうとすることではないでしょうか。しかしこの状態は命の危機です。イエス様は「ブドウの枝が木につながっていなければ実を結ぶことができないように、あなた方も私とつながっていなければ実を結ぶことはできない」とおっしゃいます。傲慢によって私たちは孤立するのです。ところがたちの悪いことに、傲慢に支配されていた時、ネブカドネザルがピンと来なかったように、その危機について無自覚なのが人間です。

その孤独を私たちに代わり、イエス様が引き受けて下さいました。十字架に向かう法廷で、誰もイエス様を弁護し助けようとしませんでした。愛し、赦し、足を洗った弟子たちは逃げ出しました。「どうして私を見捨てるのですか」とイエス様が叫んだ声に、なんと父なる神様が涙を飲んで無視された。この時イエス様と父なる神様がお互いに味わった孤独は人間の想像を超えています。私が傲慢にも一人で立とうとするとき、実はこの孤独を選び取ってしまっているのです。しかしその恐ろしさを私自身は解っていません。ただ一人真実の孤独の痛みを知って、十字架上で死をなめつくしたのはイエス様です。そのイエス様を、父なる神様は復活させられました。ここに父なる神様の愛が溢れています。

復活のイエス様は、傲慢によって輪から外れて命の危機に陥る一人の人を憐み、駆け寄ってくださいます。倒れていても抱き起し、直接手をつないで輪の中に迎えてくださいます。

人間誰もが陥る傲慢の罪。しかしそこで倒され、傲慢を砕かれたものは、遜る者とされる。遜って主を仰ぐ。それはイエス様が放した手をつなぎなおしてください、特別な祝福です。

祈りましょう

神様。私たちの傲慢を打ち砕き、遜り、あなたが真の王であると告白できるようにしてください。あなたを讃美させてください。倒され打ち砕かれた私を、神様との親しい交わりに加えなおすために、傲慢の孤独を引き受けて十字架で死なれ、復活したイエス様のお名前でお祈りします。アーメン